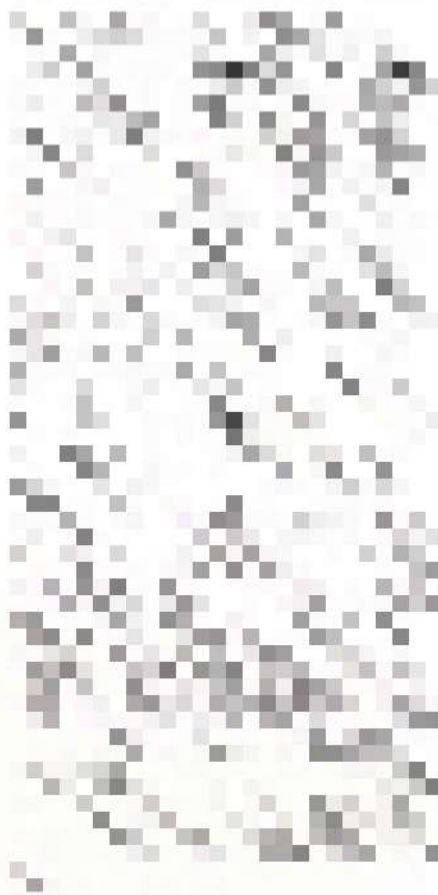
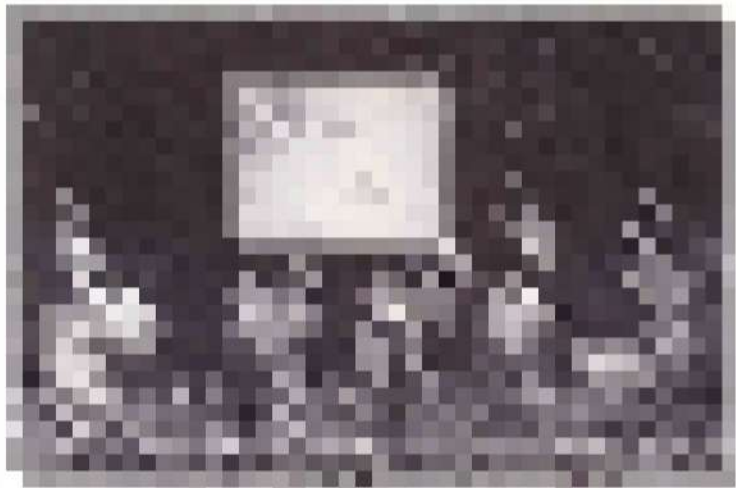
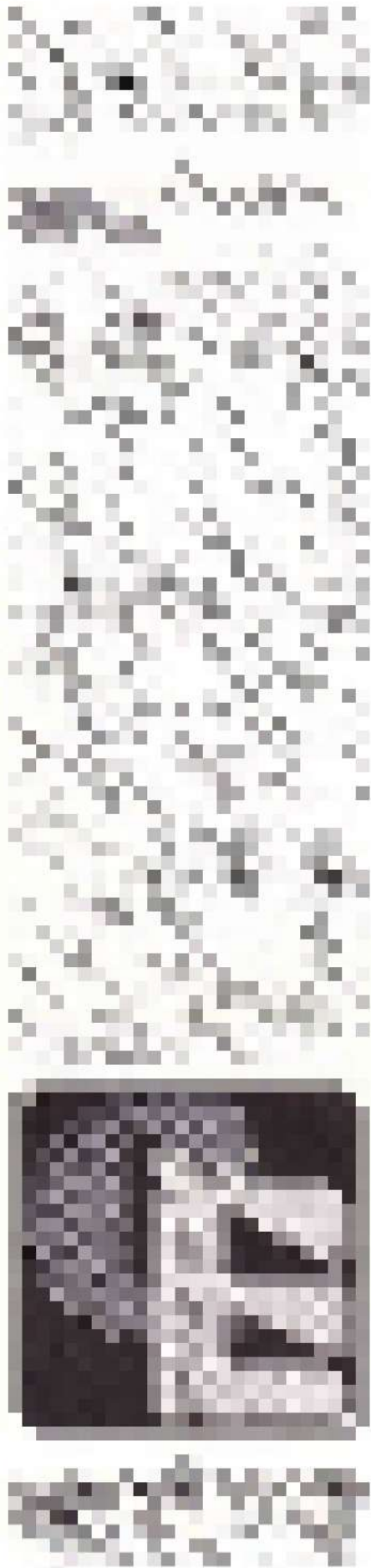


# Scramble Shot



がヴェリズモにマッチし始め、今後が楽しみになってきた。微妙な心理描写も上手く、これだけ身近に感じられるサントウツァは貴重だ。

しかしランツァーニ率いるオーケストラはミスが多発し、合唱とオーケストラもバラバラで、合唱団員はどこを見て歌ったらいいのか分からない困惑した表情。オーケストラ奏者に後で聞くと、指揮者は目をつぶって振っているので、一度ズレたら収集がつかないらしい。

《道化師》は、残念ながら聴くべきものが1つもない。クーラは熱演していたものの、この役は重過ぎるようで、〈衣装をつける〉を早いテンポで歌い飛ばしていた。ネッダ役のチェドリンスは、ヴェルディでは音程が低くなりがちなので、そろそろヴェリズモに移行したいのか、と今回の初役には納得していたのだが、骨と皮だけのような声の響きは、ヴェリズモにまったく合わず、視覚的にも、若い妻を持ったが故の悲劇でもあるこのオペラに似つかわしくない。トニオのグエルフィは押し出しは強いのだが、見た目も声もやはり年が行き過ぎている。

前半だけで家路についた方がよかったかもしれない。(中 東生)

## Opera チューリヒ歌劇場の《カヴァレリア・ルスティカーナ》《道化師》プレミア

新国立劇場でのプロダクションの再演だという。アサガロフの演出助手を田尾下哲が務めていた。指揮に問題があるものの、前者は人物像が浮き彫りにされていて、見応えのあるオペラに仕上がっていた。クーラのトゥリッドゥは、叙情的なレガートはないが、アルゼンチン人の彼が、本物のシチリア人よりもシチリア人らしく、聴いていて心配のない歌唱だった。サントウツァのマロックは、声

